
再生ボタン

銀木犀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

再生ボタン

【Nコード】

N7265C

【作者名】

銀木犀

【あらすじ】

迫るトラック。親友を助けるがために、車道に飛び出した私は死を覚悟する。しかし、神様による悪戯が起きた。停止ボタンを押したように止まる世界。私に残された選択権は、再生と巻き戻し、どちらかを押すことだった。

(前書き)

これはテーマ企画「再」小説に参加したものです。「再小説」で検索していただけば、他の先生方の作品も見れます。

全てのものが動きを止める。

目の前に差し迫るトラック、子供を抱き締める母親、空を飛ぶ鳥からす。それら全てが、停止ボタンを押されたように止まっていた。

この不可思議な光景の意味を、頭が理解していた。いや、神様に理解させられたのかもしれない。『これは神様が与えたゲーム。私は少しだけ時間を巻き戻すか、再生ボタンを押すかのどちらかを選択できる』

理由が無ければ、今すぐこの現実を巻き戻しているだろう。しかし、それは出来ない。私は子供を助けようと飛び出した親友の幸さちを助けたがために、車道に飛び出したのだ。

巻き戻しを押せば、幸を見殺しにするか、また同じことを繰り返すだけ。それなら再生ボタンを押すしかないが、トラックは目と鼻の先で、生存率の可能性は限りなく低いし、目の前に生へのチャンスをちらつかされて、押す勇気が無くなっていた。

取り合えず、地べたに付けた足を立てて、体をゆっくりと立たせた。

トラックの冷たいボディの内にいる運転手は、居眠り運転のようだった。彼は私を牽いた後に漸く気付くのだろう、自分が一体何をしでかしたのかを。

次は幸へと目を向ける。尻餅を付いて、目を見開いている幸。少

しだけ口を開いていて、言葉を探しているようだった。

何時も（いつも）眼鏡を掛けて、屁理屈っぽくて、感情を表に出さない幸がこんな顔をしているのは珍しくて面白い反面、もう二度と顔を見れないのかと思うと涙が流れてきた。

彼女へ近寄った後、体をギュツと抱き締める。この中学での三年間の思い出のピースの半分以上は彼女で埋まっていた。駆け巡る走馬灯が、不意にいつかの言葉を思い出させた。

『生き物は皆助けあって生きていくもんなのに、人間は他人を蹴り落とすことが好きだなんて、どこか歪んでるっていうか……醜い生き物だよね』

あの時は、私は聞き流していたけれど、今は凄く身に染みる言葉だった。

ゆっくりと体を起こして、元の位置へと戻る。本当は母や父の顔を見ておきたかった。其れだけで、この心の中にある黒く渦いている物を捨てる事が出来るのに。

決意が揺らぎ始める。

死にたくない、でも、幸に生きてほしい。自分さえ死ねば良いんだ。でも、痛いのは嫌だ。

私が……死ぬしかないのよ。

流れ出る涙。私は幸の顔を見て、ボタンを押した。

×
×
×

喪服を身に纏った女性。彼女は安らかに眠る少女へと話し掛ける。

「何で？ 貴方が死ぬ必要は無かったのに……」

少女の遺書にはこう書いてあった。

『自分の醜さに耐えられませんでした』と。

(後書き)

一、二分ほどの随分短いものになってしまいました。十分作る時間がありながら、たったこれだけ……。
才手も容易く読めたかもしれません。我ながら成長してないなと思います。

評価してもらえれば、助かります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7265c/>

再生ボタン

2010年11月20日03時36分発行